現行の「ジェット・トーン」MFモデル（¥8,400／税込）およびVMFモデル（¥10,500／税込）

名は体を表す、という。とすれば、ブラス・マウスピース・ワールドにあって「ジェット・トーン」ほどに「名が体を表した」ブランドはないだろう。その斬新なフォルムは、半世紀近くたった今もいささかも色褪せることなく「成層圏」を飛翔している。その聖なる領域をともに制覇した、偉大なる男が幽冥の境を隔てた今も、なお…

ジェット・トーンの伝説

特別企画
追悼 ファーガソン
その2

取材協力：セレクト・インターナショナル
（www.select-inter.com）

「ボス」、メイナード・ファーガソン氏の若き日の勇姿。本誌創刊の年に来日されると聞き、朗らかな笑顔の影で、病魔と闘っていたとも知らず「第二号の表紙を、ぜひ」と都合のいいことばかり考えていた本誌の夢は叶わなかった。ご冥福をお祈りします。合掌

ビル・ラッツェンベルガーとメイナード「ボス」ファーガソン

ジェット・エンジンの発明は、蒸気機関以来の回転系内燃機関のイメージを瞬く間に過去のものにした。前方からのエアを効率良く燃焼の場に導き、爆裂したエネルギーの噴流をダイレクトに推進力とする「ジェット」エンジンのイメージはそのまま、金管楽器奏者のあこがれの的であるダブルハイ（加線5本以上の超高音域の「通称」）領域を自在に飛翔した故・メイナード・ファーガソンのイメージにつながる。その、異様とも言えるほどエッジを落としたVシェイプのマウスピースは、数々の伝説的名演とともに「ジェット・トーン」の名を全世界に文字どおり轟かせた。

たまに誤解する向きもあるが、「ジェット・トーン」は故・メイナード・ファーガソン（以降、この不世出の天才への敬意をこめて、ここでは「ボス」と略称したい）の創ったブランドではない。創業者は、「ボス」とも親交のあったウィリアム（ビル）・ラッツェンベルガー氏（1914〜1983）。ジャズ草創の頃に産声をあげたラッツェンベルガー氏は、ニューヨークにほど近いブリッジポートに住む優れた喇叭（らっぱ）吹き。氏は、名盤「コースト・コンサート」で一世を風靡したコルネッティストのボビー・ハケットや、あのクラーク・テリー、サド・ジョーンズ、トロンボニストのアービー・グリーンやバディ・モローなど、錚々（そうそう）たる顔ぶれとステージをともにする。経営の才覚に恵まれていたのだろうか、彼はやがてそういった人脈を活かしてジャズクラブを経営し、そこで「ボス」と運命的な出会いを果したのである。

「ボス」はよく知られているように、1950年にスタン・ケントンのイノヴェーションズ・オーケストラでセンセーショナルなデビューを果した、稀代の喇叭吹き。彼らがラッツェンベルガー氏の店で演奏した時から、二人の交流は始まったと言われる。喇叭吹きが二人集まれば、会話は決まっている。「今どんなマウスピース使ってる？」だ。この二人もそうだった。当時、さらなる「成層圏」（この用語stratosphereも「ボス」ならびにその継承者達の形容詞としておなじみとなった）を目指して、新たなマウスピースのスタイルを模索していた。今も「ボス」の名を冠した同ブランドのモデルに見られる特異なシェイプの原型は、このコラボレーションから出来上がった。

「ボス」をはじめ、アル・ハートやビル・チェイス、スタン・マークやデイヴ・スタール、ドク・セヴァリンセン、スヌーキー・ヤング、ロイ・ローマン、チャーリー・シェイヴァーズなど、ジャズ・トランペットの歴史に名を刻む偉人達は同時に、ラッツェンベルガー氏のもとに集う仲間だった。彼らもまた「ジェット・トーン」の飛翔能力を増大させることに貢献してきたのだ。

ラッツェンベルガー氏と、ボビー・ハケット（右）。ともにコルネットだが、ジェット・トーンの特徴的なシェイプのマウスピースを装着しているところに注目

その、どこにカップが潜んでいるのかわからないような斬新な外観を眺め、そしてその研ぎすまされたカップに唇を当てる時、かつて同じブランドで限りない成層圏を我が物顔に飛び回っていた偉人達の音色と音楽が頭を過（よぎ）らない喇叭吹きはいないだろう。

そして今年はなにより、「ボス」のことを。

その追悼の式典では、名だたる手練達が世界中から集い（我らがエリック・ミヤシロ氏もそのひとりだった）「ボス」を思って激奏してはステージ裏で「ボス」を思って号泣していた、という（月刊「ジャズライフ」11月号より）。

「ボス」を想起させるブランドはもちろん、沢山ある（本誌別項参照）。しかしまぎれもなく「ジェット・トーン」は、その名前の響きとあいまって、筆頭にあげられてしかるべきブランドといえよう。